

「ゆめにむかつて」——栗原 恵 選手のゆめ——

くりはらめぐみせんしゅ

「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど……。バレーをつづけていますか？」

十二才の恵より」

今、活やくしているめぐみさんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。

えたじましのうみちよう

恵さんは江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、

「ボールをよく見て。」

「うんわかった。」

「手をのばして。」

「できないよ。」

「ああ、もう、そうじゃない。」

「できない。もうやらない。」

と言ってケンカになり、恵さんはできないことがくやくして、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、

「お父さん、いつしよに練習しよう。」

と、にっこりわらつてお父さんをさそうのでした。

恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校四年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。それが楽しかったので、家でも毎日練習していました。

恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。

私の一番の思い出は、バレーのことです。

大会二日目の相手は、力が私たちよりもすつこい上でした。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合つてボールをつなぎ、やつと勝てました。みんなの力です。

そして次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合つて、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ……。ガックリといつしよに、くやしなみだが出てきました。

B級の三だったけど、自分たちにまん足です。それは、とつても楽しいし合ができたからです。今まで練習をがんばったから、三セットまでねばることができました。このし合のことは、ぜつたいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもう一つとバレーをつづけていきたいと思ひます。

恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレエをつづけました。そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレエをやらないかというさそいがありました。

「バレエのことだけを考えれば、練習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。」

（転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になってしまう。）
（小学校からずっといっしょにバレエをしてきた、なかよしの友だちとも会えなくなる。）

どうしてよいかわからず、恵さんはなみだがとまりませんでした。なきじやくるすがたを見て、お父さんは、「バレエをやりたいのは、わかるよ。でも、そんなにいてまでバレエをするのか。できるのか。」と言いました。思わず、

「ううん、行く。ぜったいに行く！」

とこたえた恵さん。その時に、

（そうだ。私は、ぜったいにバレエがやりたいんだ。）

という気持ちがあったのです。

その日の夕方、お母さんと恵さんはいつものように食事のじゅんびをしていました。その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない……。」

と、ぼつりとつぶやきました。お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？ 自分がどうしたいか、よく考えてもらいなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

その夜、恵さんは、部屋で一人じっと考えました。

そして、次の日の朝、ふすまを静かに開け、

「私、やっぱり行く。」

と、お父さんお母さんに言いました。恵さんは、転校することを決めたのです。

こうして、恵さんはゆめにむかって第一歩をふみ出しました。

恵さんのその後の主な活やく

一九九八年…ひょうご県の中学校に転校する。

二〇〇〇年…山口県の高校に進学する。

二〇〇二年…高校三年生の時、全日本代表にえらばれる。

二〇〇四年…アテネオリンピックに出場し、五位入賞をはたす。

二〇〇八年…北京（ペキン）オリンピックに出場し、五位入賞をはたす。

二〇〇九年…全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレエをやめるとき、「バレエをやっていて本当によかった。」と笑顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレエ選手になりたいというゆめをもったように、今の自分を見てバレエ選手をめざす子どもたちに、ゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

【参考文献】

栗原恵（二〇〇八） 「めぐみ」 実業之日本社

日本ドリームプロジェクト（編）（二〇〇九） 「アスリートの夢 26 人のアスリート×きむ」 いろは出版